

英語教育における Aural-Oral Approach

—言葉と環境についての—考察—

杉田雅江

1

言語学者ソシュールは、体系的言語について、「無限の効果を発揮し得る可能性を内包する客観的存在である⁽¹⁾」と説き、社会の成員により、無意識的に学び共有される記号であると解したと思われる。その共同体の記号を解く言葉は、ソシュールにより、「個人が言語行為の必要からこれを選択し、これに、ある位置を与えることによって、はじめて内包する能力が発揮される⁽²⁾」と解釈された。

はなしは、個人の選ぶ場で具体化し、主体の意志で行なわれる。抽象的な記号が、言葉に変る活動を、言語活動と呼ぶ。言語と言葉の相違は、場の存在の有無にかかわる。言語は、人間の生きる場を必要としない。言葉は、聞き手によって成立する話しの場が存在し、初めて機能化する。言葉は、自己表現を可能にさせ、意志伝達をも計り得る。

遠藤敏夫氏は、「話すということは、自己を一定の環境に位置づけるとともに、聴き手をも、また一定の環境に位置づけることである。したがって、話すという時間的行為は、一定の環境に位置づけるという空間的規定、つまり話の場を必要とするのである⁽³⁾」と述べている。つまり言

葉は話しの場である環境と「密着⁽⁴⁾」に結びつく。言葉と環境の関係は、変転する。環境が有益に働いて、言葉は効果的に働く。環境の不利の作用は、言葉の破壊をもたらす。日本人が英語を運用する環境に置かれた時、異質な社会的・文化的背景のある外国人との接触で、新しい話の場に直面しなければならない。新しい場の中の人々との触れ合いは、心理的混乱をも伴う、複雑な働きをもたらす。人が、異質な社会の新しい環境の中で、伝達を計る事は、容易ではない。

言語的訓練を重視した習慣形成の“pattern practice”は、社会的場面から切り離されている。技術論のみを身につけた日本人英語習得者を、ジャパントイズ主幹村田聖明氏は、「英語ペラペラ人間⁽⁵⁾」と、称している。英語習得者は、単に英語を、おおむのようにペラペラ話す事ではない。流暢に英語を話す『英語ペラペラ人間』は、具体的な状況の場の考慮がない。時には、聞き手に不快や苛立を与える。英語で行なう話しの場の破壊は、異文化間コミュニケーションの摩擦を招くので十分な考慮を要求される。例えば、ある立食パーティーの会場で、アメリカで勉強を終えて帰国したばかりの日本の青年が、来日中のアメリカの会社の社長を相手に、一方的に話し続けた。そのアメリカ人は苛立ち、不快と疲労感を生じたので、言葉は相手の存在無視で、本来の機能を作用しなかったと解釈した。

それでは話し手と聞き手との間に、共感をもたらす心理的環境を体験する伝達を計る英語習得者は、一体何を学ばなければならないのだろうか。外国人との話しの場である新しい環境に着眼しながら、オーラル・イングリッシュの習得を文化論から述べることを、私はこの小論のねらいとしたい。

2

外国人との伝達行為は、話し手と聞き手を絶えず新しい環境に置く。

第一にその環境とは、何を意味するか考察してみよう。

言語学者神保格氏は、「或る甲人と乙人の話しの方は、『人環境』と『物環境』からなっている⁽⁶⁾」と述べている。主体を取りまく環境は、多種多様である。話しの方での人環境は、フランス人・中国人・アメリカ人等のように、単一民族、日本人が予期しない場との遭偶がある。甲人と乙人の場合は、「人以外の環境事物（動物・植物を含む）、これを、『物環境』と名づける⁽⁷⁾」と、この言語学者は指摘している。『物環境』は、イギリスの町角、パーティー会場・日本の学校の教室・空港等数々の場面がある。

『言語・人間・社会』の中で、芳賀綏氏は『人環境』の内容を、「居住地域・職場・学校をはじめ、いろいろの所属集団⁽⁸⁾」と定義づけ、その概念を、「集団の保持している社会・習慣・制度・伝統・因襲…といった文化もふくませ⁽⁹⁾」て、『社会環境』と呼んだ。話しの方である「空間規定」は、話し手と聞き手の『社会環境』で価値判断される。例をあげると、ブラジルの教会での結婚式に、日本女性が紫のドレスを着て出席すると、その女性はブラジル人に不愉快さを味わさせる。日本で紫は、高貴であると受けとる国民が多数であると思われる。しかしながら、ブラジルでは「悲しみ」を意味する⁽¹⁰⁾。色彩感覚も文化的価値で意味づけられる。

3

『人環境』と『物環境』で成立する話しの方でのコミュニケーション行動は、日本人と西洋人との間に、差異がある。その差異を考察してみよう。「話しの方と直結する⁽¹¹⁾」言葉は、「環境に支配される⁽¹²⁾」場合と、言葉は、「環境を支配する⁽¹³⁾」こともある。環境の置かれた時間や話し手の使う言葉の形態等の条件で、言葉と環境の反応は変わる。一般に、日本では言葉が環境によって限定されるので、「言葉は環境に支配される」設

定の基で伝達を計ると考える。その具体的な例としてAとBという日本人が、すし屋で食事をしている対話を、想定してみる。

A (すしを食べながら)「おいしいオヒョウだね。」 B「違うよ。ひらめだよ。」

この例で言えば、Bはいいえと断定する必要はない。“いいえ”と、意志表示なしに、日本的環境状況からAは、Bの意味を理解する。人類学者ハーバート・パッシン氏は、日本の「イエス」「ノー」について次のように述べている。「はっきり否定するのは失礼だし、けんかを売ることになりかねない。だから、否定にあやをつけることによってショックを和らげる。⁽¹⁴⁾」このように相手の立場への応答の配慮は、日本人社会の人間関係を円滑にする「間人主義」に根づいている。場の中での言葉よりは、察しの意識に身を置く人環境との深い内包である。日本人のコミュニケーションは、物的環境の雰囲気依存する傾向がある。日本の社会には数多くの喫茶店、バーが在る。そうした場所での会話で、話し手と聞き手はくつろぎ、自分との認識から出発した言葉ととりかわす。異文化間コミュニケーション研究家直塚冷子氏は、「正々堂々と自己主張できず、いつも相手の顔色をうかがって、相手の気持を察し、相手に合わせたコミュニケーションを強いられる日本人が、日頃の緊張と抑圧から解放される時。それが酒を飲むときである⁽¹⁵⁾」と述べているし、バーの「つきあいが仕事上の人間関係を緊密なものにする⁽¹⁶⁾」と、ロバート・C・クリストファー氏も述べている。素面で英語を話せない人が、酒を飲んだ場で、急に流暢になる。これは、『物環境』が話の場の効果的な作用に役立っている。話し手は、張り詰めた気持が解け、伝達を促される。日本人は、コミュニケーションを計る時、場の設定に考慮を払う。話し手自身の伝達は、聞き手や物の存在で言葉の形態に変化を生じる。その形態は、「それを聞きなさい」「それを聞いて下さい」「それをお聞き下さい」と様々な段階がある。日本人の言葉の表現は、場面依存性の

価値づけをはかる。

4

「英語はその話されている場面から切り離されていても、それだけで意味がわかる。自立性がつよい⁽¹⁷⁾」と、英語学者中島文雄氏は、述べている。「言葉は環境に支配され」ないかもしれない。むしろ「言葉は環境を支配する」と思われる。

更に、直塚玲子氏は、フランス人が日本の友人の家での夕食に招待された時、そのフランス人が、強固に言葉に対立する場面を、次に述べている。

「何もありませんが…」 (“Sorry we have nothing to serve you,”) 私 (フランス人) は、友人のことばを額面通りに受け取ったふりをして、「じゃあ、レストランに行きましょう。」 (“Then, let’s go to a restaurant !”) と言って、立ち上がった。友人は、あわてて、私を制した。「せっかく準備したのだから、そういわずに食べていってください。」⁽¹⁸⁾

日本人が「何もありません」とへり下って言った事は、フランス人が日本人の真実性を疑う要因となった。目の前には立派な夕食が、用意されている。彼 (フランス人) は、現実との矛盾に怒りを覚えた。それでレストランに行く事を考案した。言葉に信頼を置く西洋人には、日本人の『社会環境』の習慣に限定された表現が理解できない。そうした異文化の対話から、西洋人の言葉の強靱さをうかがう。

時として日本人は「つまらないものですが…」と断って贈り物を相手に渡す。そうすると外国人は、何でそんな「つまらないもの…」を与えるのかと思ひまどう。しかしながら、この贈り物に「つまらないもの」を否定する含蓄を理解することは、西洋人にとり解釈が困難である。

こうしてみると、日本人は生活環境の中で、「言葉は環境に支配され

る」ので、言語文化学者鈴木孝夫氏が、「状況が変化すれば言葉も、直ちにそれに従ってしまう⁽¹⁹⁾」と述べ、一方、西欧人は、「言葉は環境を支配する」ので、「言葉の変化に対して極めて人為的とも言える自己主張を行なう⁽²⁰⁾」と結論づけている。この鈴木氏の指適は、日本と西欧が置かれている『自然環境』『社会環境』の影響に根ざした意見かもしれない。人種が複雑に混じり合う社会では、強い伝達の表現が要求される。したがって、日本と西欧が置かれている環境の相違は、言葉の形成に大きな影響を与えている。日本人と西欧人との間では、コミュニケーションの計り方に差異が生ずると思われる。

コミュニケーションの場を、臨床心理学者の河合隼雄氏は、「母性文化の原理に基づく倫理感⁽²¹⁾は、母の膝という場の中に絶対的平等に価値をおくもの⁽²²⁾」と述べ、「場の倫理⁽²²⁾」と定義している。言いかえれば、場の調和の維持に高い美を求める。一方、河合氏は、「父性原理に基づくものは、個の倫理⁽²³⁾」と述べている。これは、個人の主張・要求に価値をおく。西洋人は、「言葉は環境を支配する」「個の倫理」の文化で生活している。日本人は、「言葉に環境が支配される」「場の倫理」の文化で生活を価値づけ、行動している。

次に挙げる例は、夏目漱石著「クレイグ先生」の中で、著者はアイルランド人クレイグ先生の金銭問題を通じて「個の倫理」と「場の倫理」の文化価値の違いを、述べている。

この手の所有者は自分の質問を受けて呉れる先生である。始めて逢った時報酬はと聞いたら左うさな、と一寸窓の外を見て、一回七志^{シリン}ちゃどうだろう。多過ぎればもっと負けても好いと云はれた。それで自分は一回七志の割で月末に金額を拂ふ事^{など}にしていたが、時によると不意に先生から催促を受ける事があった。君少し金が入るから拂って行って呉れんか杯^{スポン}と云はれる。自分は洋袴の隠しから金貨を出して、むき出しにへえと云って渡すと、先生はやあ済まん⁽²⁴⁾と受取りながら、例の消極的な手をひろげて、一寸掌の上で眺めたまま、やがて是れを洋袴の隠しへ収められる。困る事には先生決して釣を渡さない。

この引用の中で、漱石は、クレイグ先生との伝達表示の相違で一方的に追い込まれている。一回七志を月末に支払う契約を、漱石は先生と取り決めた。それに反して、先生は「恥」も知らず、時々金を要求した。「場の倫理」の外に脱出できない漱石は、何も言わず「恩」の義務を果す為に、金を渡した。場面から言葉を切り離し、自立したものと価値づけるクレイグ先生は、「いいえ」の返答がないので、生徒は彼の金の必要性に承諾したと受け取った。しかしながら、「むき出しに」金を渡す著者の非言語行動に、漱石の本来の意図を見出す。「むき出しに」金を人に差し出すのは、日本の社会で相手に対して失礼にあたる。先生にとって、その漱石の暗示も自分の状況を意識化するには及ばなかった。漱石は、「場の倫理」の文化概念で先生への義理を遂行し、場の調和を整える。そうした中で、自己犠牲が続くと、攻撃的なコミュニケーションに陥る。これは、相手を否定的にとらえる文化衝撃（カルチュア・ショック）の体験である。

5

人は、「個の倫理」や「場の倫理」に接触した場合、過多のカルチュア・ショックを受ける。特に異国でのカルチュア・ショックの衝撃は大きい。異国での英語習得者達のカルチュア・ショックの体験は、“cultural fatigue”（文化疲労）をも、生じさせる。

What is cultural fatigue? It is “the physical and emotional exhaustion that almost invariably results from the infinite series of minute adjustments” (Szanston 1966: 48) that people living in a new country make in order to cope with their new environment. The time and energy required for these adjustments leave people fatigued.

Sources of cultural fatigue are found in the socioling-

uistic context of the classroom and the new culture. Students feel frustrated not only from the process of personal psychological adjustment but also from misinterpretation of the rules of sociolinguistic behavior.⁽²⁵⁾

『社会環境』の文化・慣習に規制される sociolinguistic behavior (社会言語行動) の誤解は、ディス・コミュニケーション (伝達の失敗) で心理的混乱を引き起こし、疲労感を招く。文化人類学者の長島信弘氏は、カルチュア・ショックの「大きな形成要因は、ディス・コミュニケーションにある⁽²⁶⁾」と述べている。またこのディス・コミュニケーションの観点から、カルチュア・ショックを三つに分類した。「(1) 文化の論理的理解に失敗したとき、(2) 自分を理解させることに失敗したとき、(3) 自分とのコミュニケーションに失敗した場合である。特に問題になるのは、相手のコミュニケーション・システムのルールが理解できず⁽²⁷⁾、「自分のシステムに合わせて解釈してしまう」ことである。意見を問われているのに笑ったり、沈黙すべき時に話をしたり、「イエス」、「ノー」とはっきり返事すべき時に、下を向いたりする。日本人のこれらの行動は、伝達の「ルール違反」であると、西洋人に解釈されるかもしれない。

ジャン・マルク・ヴェイス氏は、“oui, oui” と連発するフランス語教師を、「日本人のコミュニケーションの態度について」の中で、述べている。フランス人よりも美しいフランス語でお話しになり、フランス文化にも大変くわしい先生がいらっしゃいました。私達はその先生の下で、日本語のテキストをフランス語に訳す勉強をしていました。テキストが難しいので、学生が非常に苦心して内容の説明を延々と続けている間、先生は「oui-oui」つまり、はい、はいと相槌をうっていらっしゃる。学生はその「oui-oui」を聞いて、先生は自分の意見に同意していると思

い力づけられて説明を続け満足して発表を終えたとたん、先生の「いいえ全然違います」という言葉が返ってくる。⁽²⁹⁾

Aural-Oral Approach を修得したと推定可能なこのフランス語教師は、自分のシステムに合わせて“oui, oui”と繰り返したのであろうか。相手（フランス人）のコミュニケーション・システムを身につけていないと判断される。たとえそのシステムの習得があっても、日本人の「場の倫理」概念に支配され、調和の美を計ったと推測される。その結果“non”と言うべきところを、“はいそのとおり”と述べ生徒達の適切なフランス語訳を承認した。それは、フランス文化での場の倫理違反である。それが起る時、「操作のルール」⁽³⁰⁾の知識習得は、言動を修正できる手助けになる。

6

それでは、伝達の失敗を防ぐには Aural-Oral Approach に基づいたオーラル・イングリッシュの習得で、何を学ぶべきであろうか。

Meghan Donahue と Adelaide Parsons は、アメリカにおける外国からの英語習得者に対して、communicative competence（伝達能力）の育成を、要求している。

They often know English grammar, phonology, and the rudiments of conversation but they lack “explicit instructions in what Hymes (1972) has called the rules of speaking. Students need help in acquiring ... sociolinguistic or communicative competence ...” (Taylor and Wolfson 1978: 35). Instruction in the rules of speaking includes the when, where, why, and how of giving an utterance.⁽³¹⁾

つまり、「伝達能力をだれが、だれに、何を、いつ、どこで伝達するか、伝達意味内容をどうして組み立てて表現するかなど、社会で暗黙に認められている「伝達規則」を身につける事⁽³²⁾」を、英語学習者は習得すべきである。Aural-Oral Approach の習得に科学的な記述に基づいた音声・文法・語いは、言語能力育成に重要である。しかしながら、その習得で文化の存在しない空間が現実化しないように注意する必要がある。伝達内容を組み立てて表現する術は、『人環境』・『物環境』の習得と深いつながりがある。特に、『社会的環境』の規制を、見逃すべきではない。その規制のない伝達表現は、機械的な繰り返しの英語を生じる。Hymes は、communicative competence と cultural behavior (文化行動) の結び付きの重要性について、次のように述べている。

He sums up: "the goal of a broad theory of competence can be said to be to show the ways in which the systematically possible, the feasible and the appropriate are linked to produce, and interpret actually occurring cultural behavior."⁽³³⁾

英語で伝達内容を組み立てるには、異質な環境である「場の倫理」・「個の倫理」を学び、その異質なものとの接触から、人は自文化中心の文化から脱却できる。そうした解放は、どんな場合でも、対等な対話を可能にする。更に、異文化との対話の介在は自文化の活発化を促すと思われる。

7

文化についての定義がさまざま説かれている。その中で、「W・G・サマーとA・G・ケラー (社会学者) は、「環境全体に対する適応性」⁽³⁴⁾

の重要性を力説する。「話し言葉に支配される環境」や「話し言葉を支配する環境」、つまり、外国語習得者は「場の倫理」と「個の倫理」の二つの文化に適応して生活のできる能力を身につけなければならないと思われる。しかし、習得者は二つの文化の中で自己確認ができず、アイデンティティーを失う危機に直面するかもしれない。夏目漱石が、『猿が手オ持つ』の中で描いていたように、「東洋を忘れ西洋も知らない根無し草のような日本人⁽³⁵⁾」は、口先だけの技術的な英語しか操れない。それに反して、日本文化型にかたよった時に排外主義にもなりかねない。それにも注意が必要である。

「場の倫理」や「個の倫理」の社会に、実際に出会うのは限られた人である。たとえば、英語習得で使われる教科書を考察した限りでは、英語を母国語とする国の記述が多く、日本についての場の設定の中で、話し言葉を中心とした状況の記載が欠如しているようである。そうしたことは、日本人が自分の意志を主体的に述べられない要因になっている。ここで注意すべきことは、記述された言語の背後の文化の探求を追求することである。そうした探求は、自国の文化と外国の文化を比較させ、その相違の認識は、自国文化への内省を促す。つまり、自分自身の点検を導く。このように異文化介在は、人の精神構造に変化をもたらして、物事を多角的にとらえる人間を生み出すと言えるだろう。太田雄三氏によると、「主体に富んだ人間は、自分で考える習慣を持ち、何語を媒介するによらず浅薄なものに満足しない⁽³⁶⁾」と述べている。この主体性のある日本人は、日本人としての場を外国語で創造できる人と言えよう。それを、亀井俊介氏は、「国際的な説得力⁽³⁷⁾」の英語と称しているであろう。『国際的な説得力』は、対等な話し合いの場の環境で、話し手と聞き手が「われわれ意識」を持った時に生れるにちがいない。この『われわれ意識』は、人格と人格の触れ合いから生ずる心理現象であろう。Aural-Oral Method によるオーラル・イングリッシュの習得は、その人柄が

確証もなく現われるところとなるのである。言葉は、個人と社会を関係づける媒介物である。

<註>

- (1) 遠藤敏夫『環境と言葉』一環境言語学入門一 (学習房出版, 昭和49年) p. 8.
- (2) 同上, p. 8.
- (3) 同上, p. 9.
- (4) 同上, p. 16.
- (5) 村田聖明「日本人の英語」(英語展望No. 79, 英語教育協議会, 1983) p. 12.
- (6) 神保格『言語論』(岩波書店, 昭和36年) p. 42.
- (7) 同上, p. 43.
- (8) 芳賀綏『言語・人間・社会』(人間科学社, 1979) p. 119.
- (9) 同上, p. 119.
- (10) 遠藤敏雄『英文学に現われた色彩』(プレス東京, 昭和46年) p. 57.
- (11) 遠藤敏雄『環境と言葉』一環境言語学入門一 (学習房出版, 昭和49年).
- (12) 同上, p. 13.
- (13) 同上, p. 13.
- (14) ハーバート・パツシン (徳岡孝夫訳)『英語化する日本社会』(サイマル出版会, 1982) p. 158.
- (15) 直塚玲子『欧米人が沈黙するとき』(大修館書店, 1981) p. 228.
- (16) ロバート・C・クリストファー (徳岡孝夫訳)『ジャパニーズ・マインド』(講談社, 1983) p. 158.
- (17) 中島文雄『日英のことばと文化』(三省堂, 昭和47年) p. 7.
- (18) 直塚玲子『欧米人が沈黙するとき』(大修館書店, 1981) p. 228.
- (19) 鈴木孝夫『閉された言語・日本語の世界』(新潮選書, 昭和58年) p. 196.
- (20) 同上, p. 196.
- (21) 河合隼雄『母性社会日本の病理』(中央叢書, 昭和58年) p. 13.
- (22) 同上, p. 13.
- (23) 同上, p. 13.
- (24) 夏目漱石『漱石文学全集第十巻』(集英社, 昭和58年) p. 156~157.
- (25) Meghan Donahue and Adelaide Heyde Parsons, The Use of Roleplay to Overcome Cultural Fatigue (TESOL Quarterly Volume 16, September, 1982) p. 359.
- (26) 近藤裕『カルチュア・ショックの心理』(創元社, 昭和57年) p. 70.

- (27) 同上, p. 71.
- (28) 同上, p. 71.
- (29) ジャンーマルク・ヴェイス 『日本人のコミュニケーション態度について』 (河出書房新社, 昭和56年) p. 29.
- (30) J. V. ネウストプニー 『外国人とのコミュニケーション』 (岩波新書, 1982) p. 52.
- (31) Meghan Donahue and Adelaide Heyde Parsons, The Use of Roleplay to Overcome Cultural Fatigue (TESOL Quarterly Volume 16, September, 1982) p. 360.
- (32) 羽島博愛・伊村元道 『外国語教育の理論と構造』 (学習研究社, 1981) p. 126.
- (33) 岩城禮三 Communicative Competence and Syllabus Design (札幌医科大学人文自然科学紀要, 第21巻, 1980) p. 71.
- (34) 倉田恵介 「文化・コミュニケーション・異文化間コミュニケーション」 (札幌商科大学論集第25号, 1979) p. 4.
- (35) 羽島博愛・伊村元道 『外国語教育の理論と構造』 (学習研究社, 1981) p. 46.
- (36) 太田雄三 『英語と日本人』 (TBS ブリタニカ, 1981) p. 303.
- (37) 亀井俊介 「明治の英語」 (不死鳥 No. 54, 南雲堂, 1983) p. 17.

(追記) この論文を作成するにあたり, 札幌商科大学川瀬裕子教授に貴重な助言をいただき, 深く感謝致します。